

伝能因本枕草子第二八六段における

「舟に乗りてありく人」の一部私解

Personal Interpretation of the Part of "Fune-ni-Norite-Ariku-Hiro" in
So-called Nohinbon Makuranososhu, No. 286

鈴木弘道

私は近著『平安朝文学とその周辺』の中で、枕草子の伝能因本第二八六段「うちとくまじきもの」の一部私解を公表したが、本稿はその続編に相当するものである。

まず、日本古典文学全集本により、本文を掲げる。

思へば、舟に乗りてありく人ばかりゆゆしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さるはかなきものに乗りにて、漕ぎ行くべきものにぞあらぬや。ましてそこひも知らず、千尋などにあらむに、物いと積み入れたれば、水際は一尺ばかりだになきに、下衆どもの、いささかおそろしとも思ひたらず走りありき、つゆあらくもせば沈みやせむと思ふに、大きな松の木などの、二三尺ばかりにてまろなるを、五六ほうほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。(四三四・四三五頁)

【通釈】考えてみると、舟に乗って往来する（水上生活をしている）人ほど、恐ろしいものはない。あまり深いというほどでもない所でさえ、あのような頼りない物に乗って、漕いで行くことができそうなものでないのだよ。なおさら、底の果てもわからず、千尋などもあろうと思われるのに、（舟に）物をとてたくさん積み込んであるので、水面から船べりまでは一尺ほどさえなのに、身分の低い船人夫たちが、少しも恐ろしいとも思っていない（平気で、（舟の中を）走りまわり、（また）ちょっとでも乱暴なふうにも扱われれば、（舟が）沈みもするだろうかと心配するのに、大きな松の木などで、（直径）二・三尺くらいで丸いのを、五本六本、ぼーんと（音を立てて、舟の中に）投げ込みなどするのは全く肝がつぶれるほど恐ろしくて（ひどい）ものである。

【語釈】 ○ありく 場所を移動してまわる意。田中重太郎先生著『枕冊子全注釈』（以下、『全注釈』と呼称。）第一巻九六・九七頁参照。

○ゆゆしきもの この「ゆゆし」は、不気味で恐ろしい意。『全注釈』第一巻九八頁参照。「いま／＼しく恐ろしき心なり」（『春曙抄』）。

○よろしき深さ かなりの深さ・並み二通りの深さ。「大かたなる深さにてもと也」（『春曙抄』）。「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順に、優良から次第に最悪に下がって行く。「よろし」については、『全注釈』第一巻二〇二頁参照。

○さるはかなきもの ここは、「舟」をさす。「さる」は、底本「さま」。三巻本・前田本により校訂。『春曙抄』本文「さま」に、「いさる」と施注し、『通釈』『新釈』などそのイ本文によって「さる」と改訂した注釈書もないが、右の『春曙抄』本文によって注されていることが多数見られる。「ま」（満）と「る」（流）の草体の酷似による異同であることはいうまでもない。とにかく、「さま」とある底本は退けられねばならない（田中先生著『枕冊子本文の研究』七九六頁による）。

○漕ぎ行くべきものにぞあらぬや 「べき」は、可能の助動詞「べし」の連体形。「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形。「や」は、詠嘆の終助詞。

○まして 一層・なおさらに・もっと、の意。時枝誠記氏著『古典

解釈のための日本文法』（『日本文学教養講座』第十四巻）に、

「まして」は、動詞「ます（ます）」の連用形に接續助詞「て」の附いたもので、本来、物或は物の度合の増すことを云つた語で、現代語の、「況んや」といふやうな意味とは異なるのである。従つてこの語は、一般に動詞連用形に「て」が附いたものと同様に、被修飾語を想定して解釋すべきである。（一五五・五六頁）

また、同氏・増淵恒吉氏著『古典の解釈文法』に、

「まして」は、文中に用いられた時は、述語の状態や作用が、一層多くなることを表わす副詞として用いられるが（「増して」の意）、文の初めに用いられる時は、前文を受けて、「前文の事にも増して」の意となり、接統詞の機能を持つ。（中略）
雨うち降りたるは、ましてつれづれなり（枕草子、つれづれなるもの）。

鳥の……飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし（枕草子、春は曙）。と説かれている。

○そこひも知らず 「そこひなし」と同義で、はてがない・きわめて深い、の意。「そこひ」は、「ソコイ」と発音する。「底方」の転という説もあるが、「そこ」に接尾語「ひ」がついたものである。「底意」（『旁註』）説はいかがであらう。深い底・果て。普通、際限の意に用いられる。『古今集』巻第十四恋歌四に、「そこひなき

淵やは騒ぐ山川の浅き瀬にこそあた波は立て」。

○千尋 「尋」は、「ひろぐ」の「ひろ」で両手を左右へ伸ばしひろげた長さ、およそ六尺(約一メートル八〇センチ、一尺は〇・三〇三メートル)をいう。「つか」(束)が手で「つかむ」の「つか」で指四本揃えた長さをいうのと同様である。「千尋」は、はかり難いほど、きわめて長い、または深いことをいう。

○水際 舟べりから海面までの間。

○下衆ども 「下衆」は「下種」「下司」「下主」とも書き、「上衆」(貴人の称)の対。身分の低い者・素姓の卑しい者。召使い・しもべ、の意の場合もある。ここは、船人夫をさしている。「ども」は、複数を表す接尾語。

木 ○つゆ 副詞。少しでも。下に打消の語を伴う場合は、少しも・ちんとも、の意となる。

○大きな松の木などの…… 「などの」の「の」は、同格を表す格助詞。「松の木」といえば、「松の板」と記していない以上、「まろなる」ものと当然わかりきっているはずであるのに、下にわざわざ「まろなる」とあることにより、「二三尺ばかり」は、直径が二三尺ぐらい(約六〇センチメートルから約九〇センチメートルぐらいまで)あると解したい。塩田『評釈』は「径二、三尺」、『大系』は「さしわたし二、三尺」と解く。「まろなる」は、形容動詞「まろなり」(円なり・丸なり)の連体形で、「まろなり」は、まるい、の意。この「二三尺ぐらい」がもし長さをいうのであれば、単に「二

三尺ばかりなる」とあるべきではなからうか。諸注釈書は、特に「長さ」と断わっているもの(『新解』『精講』『評解』『角文』『全集』『旺文』など)や何も断わっていないものがある。

○ほうほうと 材木を投げ込む音の形容で擬音語(擬声語)の副詞。『全注釈』第一卷一九〇頁参照。『落窪物語』(日本古典文学大系本)巻之一に、「かさをほうほうと打てば、屎のいと多かる上にかままり居ぬ。」とある文中の「ほうほうと」につき、松尾聡氏は次のように説かれる。

底本「ほう／＼」とあるのを、仮に改めた。全書本大成本(久老本も)「ほうほう」。ハ行の音はP音であったといわれる。上代にすでにF音に変わったらしいが、擬声語は、P音をのこしたものもある。また、元来日本語には擬音がないので、擬声語にのみ用いた擬音の表記には古くは「う」を用いた。従って「ほう」は今日の表記では「ほん」にあたるわけである。

また、つとに、亀井孝氏は、このような「う」につき、「東京大学国語国文学会 研究発表要旨」の「孤コンコン」と題して話したことども(『国語と国文学』昭和二五・二月号)において、

「コン」の形は、最も遡っても室町時代、大體は江戸時代以降にみえるのであつて、平安時代から鎌倉室町時代へかけては、「こう」の形で文献にあらはれる(散木奇哥集、今昔物語集、沙石集・曾我物語。奈良時代に至ると、例が乏しくなつて、いさゝかの假説の上に假説を設けて解釋をおしすゝめねばならぬ

憾みはあるが、とにかく一應、萬葉集三八二四番の歌に「許武」とあるのは、その左註からみて「狐聲」を暗示した技巧と考へる。そこで、もしこれを認めるならば、「許武」と「コン」と中間の「こう」も、やはり鼻音を伴った發音で似て實現されたのではなからうか。もつとも、さういふ意味の解釋も、すでに存しないではない（吉澤義則、國語史概説、六二頁以下）。しかし、その解釋は、「ン」の音をあらはすのに「ウ」の文字を借りたと解するのである。これは、問題を「ン」といふ文字に轉嫁したにすぎず、「ン」の音價（音価）の歴史は、結局、考慮されてゐない。これに對して、わたくしは、直接、「ウ」に對し、鼻音（ウ）を擬することによつて、これを解くことはできないかと考へた。

と述べておられる。田中先生の著『枕冊子本文の研究』に見える説は、次のとおりである。

この冊子 すさまじきもの の段の、
又、必ず来べき人の許に、車をやりて待つに、入り来る音すれば、さななりと、人人出でて見るに、車やどりに入れて、
轆ほうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、（岩波文庫本 上巻 九六一―九七頁）

の「ほうと」や うちとくまじきもの の段に見える、
大なる松の木などの二三尺ばかりにて円なるを、五六は
う／＼と投げ入などするこそいみじけれ。（下巻 一〇二頁）

の「ほう／＼と」は、落窪物語卷二の

顔つきただ駒のやうに、鼻のいららぎたる事かぎりなし。ひ
うと嘶きて引きはなれていぬべき顔したり。

の「ひうと」がいまの「ひんと」に近い音を写してゐるといはれる——もつとも、これについては橋本進吉博士に「ひうと」は「いうと」が正しい本文であろうという説（『国文学叢話』所収「馬の鳴き声その他」があり、所弘氏にも同様の説がある。「いうなど」「日本古典全書月報」——とは異なり、「ほん」と「あるいは」「ほん」と「ほんぽんと」または「ほんぽんと」の音を写してゐるのであらうことは、この「こほこほ」や「こほめく」が「こほこほと」「こほめく」あるいは「こほこほと」「こほめく」と呼ばれたのではないかと考へさせるのであるが。（落窪物語卷一の「かく立てるはなぞ、居侍れとて、笠をほう／＼とうてば、尿のいと多かる上にかがまりぬ。」とあるのも「ほん／＼と」「ほん／＼と」の例である。）（七七三・七七四頁）

○投げ入れ 「新解」は、

舟の中へなげ込むのである。こゝは荷物船を描写している。

と解き、塩田「評釈」も、「鑑賞」の中に、

なぎとあれとの変化、板子一枚下は地獄という海上生活が、かなり克明にうつさされている。港々の風情、たとえば積荷のありさま、碇泊の船々にとぼる灯、あるいは港の暁、こういった情景描写は、おそらく作者の実感であろう。（圈点鈴木、六四八頁）

と評している。

ところが、『解環』五には、「諸注が、この松丸太の実体が何であり、何を目的として、誰が何処へ大きな松丸太を五本も六本も、ボンボンと投げ込むのであるかということ、つまりこの文章の内容を、果たして理解しているか否かということ」（二六五頁）に疑問を抱かれた著者萩谷朴氏は、若き日の貴重な体験に基づいて、「この松丸太は決して積荷ではない。防舷材として舷側に装備された松丸太なのである。」（二六六頁）と結論され、その「防舷材」の具体的説明と、本文箇所の実体につき、「付図」を掲げて次のように記しておられる。（『集成』はその要約である。）

道 弘 木 鈴

今日の船乗仲間ではこれを、正しくは海軍用語の「防舷物」という呼称によって呼び、俗には「ペンドル」と称しているとのことである。船が接岸もしくは、接舷しようとする時に、直接衝突して舷を痛めることのないように、舟子は、舷の棚板の上を猿のように伝い走って、この防舷物を次々に、ボンボンと海へほり込むのである。（中略）防舷物は、片方の端近く穴がかけられて、その穴に麻綱を通して舷に結びつけられているので、海に投げ込むと、舷側に垂直にブラ下がつて、防舷の機能を果たすわけである。（中略）この本文箇所の実体に就いて、

最新の松尾全集すら、

大きな松の木などの、長さ二、三尺ぐらいで丸いのを、五

つ六つ、ぼんぼんと舟の中に投げ入れなどするので、と口訳し、岸上大系は、

さしわたし二、三尺もあって丸いままの木を五、六本、ぼんぼん投げ入れなどするのは、

と説明しているが、船積みする程の松材ならば、直径はともかく、長さは二メートル乃至五メートルもなければ、木材としての価値はないから、長さが二、三尺では全く意味がない。そこで、その不当を補うために、さしわたし二、三尺という意見も出されたのであろうが、直径六〇センチメートル乃至一メートル近くもあって、その直径にふさわしく長さが二メートル乃至五メートルもあるような巨材を、どうしてボンボン投げ込むことが出来ると考えたのであろうか。（二六六―二六八頁）

これは、一般の国文学者の全く想像もつかない萩谷氏自身のいわれる「明解」なる新説であることはまちがいないであろう。しかし、問題がないわけではないので、以下に、そのことを述べておこう。

一体、このような「防舷材」なるものは、現在とはかく、清少納言の時代に、はたして一般に使用されていたのであろうか。残念ながら船の知識が乏しいので一応、手取り早く、渋沢敬三氏編著『絵巻物による日本常民生活絵引』（以下「絵引」と呼称。）に見える船の若干を調査すると、まず、『北野天神縁起絵巻』に描かれた、『絵引』第一巻一六二図の平安末期頃の内海航路大型船には、「防舷材」らしいものはなく、萩谷氏の「付図」における「防舷材」の保

管場所に相当する箇所は、船柵せがし（船棚・船端せがた・舷などともいう。）と
なっていて、「角材をくみ梯状の張出をつけ艀床せがたにしている。この
上に板をならべて足場をもうけ、そこに人がならんで櫓をつかう」
（二九八頁）わけである。もっともこの船は屋形を設置した十挺櫓
の帆船で、「付図」とは比較することができないかもしれない。『一
遍聖絵』（『一遍上人絵伝』）には、大小の漁船・客船・荷船にぶね（商
船）・家船などがいくつか描かれているが、いずれも「防舷材」な
どは見られない。特に、『絵引』第二巻二四九図に見える、米俵を
たくさん積んだ小型商船は、「厳島神社まへの船。（中略）剗船の周
囲に波よけの棚のついた準構造船（鈴木注、「剗船式の船底材に舷側
板をつけた形式。」あるいは、「船体の幅を広くするため、外側に開いた
舷側板を入れ」ることもある。『週刊朝日百科 日本歴史』中世II一
一〇頁）で、櫓も2挺あり、両舷には苦様の波除けの垣がつくら
れている。（中略）商船は荷を積むのを主目的とし、便を借る人が
あればのせた。」（一四六頁）というから、清少納言の見た「物いと
積み入れ」た荷船も、この船によって、同様と言えないながらも、
想像できないでもなからう。さらにまた、『絵引』第二巻二五〇図
の船は、「兵庫沖の船のさま。（中略）船べりに棚がとりつけられて
いる。波除けとして利用するとともにそこで櫓をこいだ。（中略）
帆柱は1本で席帆を張るようになっていた。（中略）胴の間には米
俵がたくさん積んであり、表には乗客がのっている。客船ではなく
荷物運搬を主とした船に便をかりているのであろう。」（一四八頁）

と解説され、荷船であっても帆船である点、清少納言のいう荷船と
大分異なっているようであるものの、「防舷材」は全く取り付けら
れていない。

かくて、絵巻物による限り、平安時代末期になっても「付図」に
あるような新案の「防舷材」なるものが荷船に設けられていなかっ
たとすれば、それよりも古い清少納言の時代に、そういうものが実
際に使用されていたとは、とうてい考えることができないのではあ
るまいか。しかも、特にそのような「防舷材」は一般に知られてい
ないにもかかわらず、「付図」自体の出典が明示されていないの
は、どうしたことであろうか。しかし、絵巻物には、あらゆる種類
の船や船具が描かれているとは限らず、「防舷材」を設けた荷船が
実際に運航していたとしても、偶然、描き漏らされているかもしれ
ないことを想像して、念のため、『古事類苑』器用部二十五「舟
上」「舟下筏併入」を調査したが、やはり「防舷材」に相当するも
のについては全く見出すことができなかった。

さて、清少納言の、この場面で描く船は、「物いと積み入れたれ
ば」とあるから、前掲『絵引』第二巻二四九図・二五〇図の『一
遍聖絵』のように、何人かの乗客が乗っていたか否かは別として、
また、帆船であるかどうかは論外として、少なくとも荷船であるこ
とは否定できない。しかも、その荷船は「水際みづぎはは一尺ばかりだにな
き」沈没の危険きわまりない状態で、そのことだけでも「いみじ」
と感しさせられるにもかかわらず、さらに「下衆ども」が「いみ

「じ」き行動を起こす光景であることもまちがいがいい。そのような時、もし、萩谷氏説のとおり、「大きな松の木などの、二三尺ばかりにてまるなる」「防舷材」(氏は「大体直径二〇センチメートル以上、長さ一メートル前後の松丸太」と説かれる。)を「次々に、ボンボンと海へほり込む」というのであれば、荷船に対する影響なども、僅かに船を揺れ動かせる程度であり、「下衆ども」の行動としても決して「あらくも」何ともないはずで、むしろ、その「防舷材」の重量だけ船は軽くなり、それを見ている清少納言も、「いみじ」どころか嬉しくなって安心感に胸を撫で下ろすにちがいない。しかも、萩谷氏は、

道

弘

木

鈴

幼少な清少納言を待たずとも、瀬戸内海での巡航船が、今將に埠頭に接岸しようとする時、船はまるで吸い寄せられるかのように加速して岸壁に近付く、船員は、文字通り猿の如く柵板の上を伝い走って、防舷材を手荒くボンボンとほり込んでゆくのである。これは成人の筆者にも目ざましい見ものであったし、

従軍四年の空白を一瞬に飛び越えて、『枕草子』本段の疑問を即座に解決してくれるだけの強い印象があった。

と述べて、この場合の光景を船の「接岸しようとする」光景と解されたが、はたして、本文にそのことを明確に証拠づける箇所があるのだろうか。なお、もし「防舷材」を「海へほり込む」時には、當時として、「ほうほうと」という擬音語を使うのが最も適切な表現であったらうかという疑問も捨て切れない。「下衆ども」の手か

ら「防舷材」が一旦、空中に放り投げられる瞬間をあえて「ほうほうと」と表現していると解することもできそうであるが、それならば、「防舷材」の保管場所から海面まで「一尺ばかりだになき」僅かな距離を考慮すると、やはり、海へ「投げ入れ」た着水時の音を「ほうほうと」と形容していると見なす方が自然ではなからうか。したがって、現代語の「ボンボンと」よりも「ザブザブと」「ザブンザブンと」「ジャブジャブと」「ジャンジャンと」「ドブンドブンと」などの方が適正な音と考えられるが、それは、決して中古語の「ほうほうと」に相当するとは思われず、たとえば、

*この平張は川にのぞきてしたりければ、つぶりとおち入りぬ。(『大和物語』一四七段。「つぶりと」と読む説もある。)

*水ニツフリト落入ヌレバ、翁ハ不見エヌ成ヌ。(『今昔物語』

卷第二十七第五)

*九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、ツ、暗ナルニ、季武河ヲザブリノト渡ルナリ。(『今昔物語』卷第二十七第四十三)(以上、

日本古典文学全集本。圈点鈴木)

のごとく、「つぶりと」「ツフリト」「ザブリノト」などあるべきであろう。ちなみに、山口仲美氏「中古象徴詞の語音構造―清濁に問題のある語例を中心に―」(『国語学』第九十三集、昭和四八年六月)は、

中世	・ガブガブト (Gabusabuto) ・ダブダブト (Dabusabuto) ・ザブザブト (Zabusabuto) ・ドブドブト (Dobudobuto) ・ダブダブト (Dabusabuto) ・ユブユブト (Yubuyubuto)
現代 (K)	・ガブガブ ・ジャブジャブ ・ダブダブ ・ケブケブ ・ズブズブ ・デブデブ ・シャブシャブ ・チャブチャブ ・ドブドブ ・ザブザブ

の表を掲げ（鈴木注、「K」は小林英夫氏「国語象徴音の研究」『文学』一卷八号、昭和八年一月』を参考にされた由。）、

表7（鈴木注、前掲の表をさす。）をみると、水もしくは水分に関連する音や状態をうつした象徴詞においては、B音節は、濁音「ブ」であることがわかる。「ガブガブト」「ザブザブト」「ダブダブト」その他、いずれもそうした象徴詞である。従って、中古においても、

○水・水分に関する音や状態をうつした象徴詞においては、B音節の「ふ」の文字は、濁音「ぶ」である蓋然性が高いといえる。

と述べられたが、これによっても、「ほうほうと」は、少なくとも「水・水分に関連する音や状態をうつした象徴詞」とはいえず、「防舷材」の着水音とは全く別の擬音語と考えるべきであろう。

ここにおいて、清少納言の見た荷船は、「防舷材」など設けられていなかったらしいこと、「ほうほうと」は、材木の海に投げ込まれる音としてあまりふさわしいとは思われないこと、などにより、萩谷氏説は到底納得しがたいことになるわけであるが、そうすると、「大きな松の木などの、二三尺ばかりにてまるなる」を船か

ら海中へ「投げ入れなどする」のではなくて、どうしても逆に埠頭から荷船の中へ、「下衆ども」の中の何人かが「投げ入れなどする」と、解くべきであり、荷船の接岸・碇泊中の光景が描かれていると見なければならなくなるのではあるまいか。荷船の中へ「投げ入れなどする」松丸太は、直径が「二三尺ばかり」であるというから、長さは短くても二メートルぐらいで、長ければ五メートルぐらいにもなるのではないかと想像されるが、これは明確に判断しがたいため、とにかく埠頭からこの松丸太「五つ六つ」を荷船に「投げ入れなどする」ためには、埠頭では数人の「下衆ども」が協力せねばならないし、船上でも何人かの「下衆ども」が松丸太の受け入れ態勢を取ったり、その他の船上作業のため、船の揺れ動くのもかまわずに走りまわる必要がある、それらの松丸太を一本ずつ荷船に「投げ入れ」た場合は、おのずから「ほんぼん」と大きな音をたてることになるはずである。「ほうほうと」は、「ほんぼん」とか「ほんぼんと」とかいう単調な、しかも速くてリズムカルな音ではなく、もっと時間的に不規則であって緩やかで、傍らで見る者の腹にズシンとこたえるような「ほんぼん」という擬音語ではないだろうか。埠頭にいる「下衆ども」は、たとえば、重い大きな松丸太を一斉に「ヨイショ」と持ち上げ、次に、たとえば、「ヨイセーノ」の掛声とともに荷船の中に投げ込むわけで、投げ込まれた瞬間の音が「ほうほう」であろう。荷船は、ただでさえ沈没しそうなど積荷されているのに、船上の「下衆ども」が走りまわると、

そのために船は左右に揺れ動き、さらに大きな長い松丸太が五・六本もその船の中に、乱暴にも、ぼーんぼーんと大きな音をたてさせて投げ込まれるのであるから、見ている清少納言が、いよいよ船が沈没するのではないかとほらはらして、「いみじ」と肝をつぶすのは当然であろう。すなわち、この場合の「いみじ」の対象は、

(1) 積荷された荷船の現状。

(2) 大きな松丸太の積み込み作業。

(イ) 船上の「下衆ども」の動作（走りまわること）。

(ロ) 埠頭の「下衆ども」の動作（大きな音をたてさせて船に積み

込むような、松丸太に対する乱暴な扱い方）。

(ハ) 松丸太の積み込まれた時に発する大きな音。

木ではあるまいか。

鈴 ○いみじけれ 形容詞「いみじ」の已然形で、係助詞「こそ」の結

び。「いみじ」については、『全注釈』第一卷九八・一六七頁参照。

ここは、悪い意味に使われ、肝がつぶれるほど恐ろしくてひどい、の意。